

第六章 百祭り・市川のお祭り暦

市川は、江戸時代中期に代官所が置かれ、紙漉き業が発展し、峡南の政治経済の中心地になった。川から街を守るかのようにまちの外縁に多くの社寺があり、季節毎に大小の祭礼が行われる。また、一丁目から七丁目、保泉、古倉、落合など小字ごとに、旅の安全を祈る道祖神や火伏せの秋葉さんなど、疫病や火災、風水害などから地域を守る小祠が祀られ、いつしか「市川百祭り」、市川ではいつもお祭りがあるとまで言われるようになった。

ここでは今に伝わる主な月々のお祭りを紹介しよう。

(一) 正月から春のお祭り

◆ 一月

元日は初詣が始まる。前夜から家族ぐるみで弓削神社①・御崎神社・宝寿院などに詣でる。おみくじを引き絵馬に願いを記して奉納する。

十四日は小正月である。昔は青年達が小屋

掛けし、米粉でできた繭や米俵の形のお団子を小枝にさして持ち寄り、**どんど焼き**の火であぶって食べるなど、子どもには楽しいお祭りだった。今は各丁目の道祖神や育成会ごとに、**道祖神祭**が行われる。笹の葉を持った子どもたちが集まって太鼓を叩いて**“アクマツパライ”**と叫びながら、その地域の家々を駆け巡り、おもてなしを強要する楽しい祭りである②。(あくまっぱらいは、小正月行事・道祖神祭りの一つで、神奈川県北部から山梨県南部で行われている。)

十六日は**秋葉社祭**が行われる。火防(ひぶせ)の神様である秋葉さんは、道祖神に隣り合う木造の小祠に祀られている所が多い③。二丁

目の秋葉社には三尺坊大権現可睡斎の火防の神札が入っている。

秋葉さんの祭りは地区によつて五月や九月などまちである(コラム九参照)。



図6② あくまっぱらい (町内各所)



図6③ 古倉の秋葉社



図6① 初詣 (弓削神社)

二十三日 福寿院地藏堂④、お三夜さんで知られる**二十三夜祭**、日没から月の出までの間に西に向かって拝礼し日月の恵みに感謝を捧げ五穀豊穡と家内安全を祈願する。昔はだるま市で賑わった。

◆二月

三日 八幡神社**節分会**である。太鼓の先導で赤鬼、青鬼、福の神が氏子の家々を廻る。「鬼は外・福は内」の掛け声で豆を投げつけられる。

二月第一日曜日 御陣屋稲荷社や福寿院、各お屋敷のお稲荷様を祀る**初午祭**がある。

◆三月

第二日曜日 保泉のお**荒神さん祭り**⑤。三宝荒神（かまどの神、火の神、火伏の神）を秋葉さんと一緒に祀っている。「鬼石」の伝説もある。

第三日曜日 「紙のまち生き生きまつり」⑥、平成十一年から始まったまちづくりイベントで、中央通

りに百数十米の和紙（市川特産の障子紙）をひろげ、参加者が思い思いにその年のテーマにそって書や絵など筆を走らせる

◆四月

三日 「**桃の節句**」市川では三月ではなく、月遅れで行っている。

同日、御幸祭「**芦川の川渡り**」⑦。
芦川対岸の表門（うわと）神社から出た神輿は、二匹の狐に先導されて雪解け水の芦川を川渡りして、一丁目の御崎神社に行幸する。峡南の春を呼ぶ盛大な祭りである。全国的に



図 6 ⑤ 3月中旬 御荒神さんまつり



図 6 ⑥ 3月紙のまち生き生きまつり



図 6 ⑦ 4月3日 御幸祭・芦川の川渡り



図 6 ④ 福寿院地藏堂
（正徳5年（1716）築）



八乙女神明社

元は平塩にあった紙明社が移転、天明年間神明社に改称、昭和23年八乙女社が移築してきた



八幡神社

年代は不詳、祭神は仲哀天皇、
応神天皇、玉依姫命、他九社あり



法伝寺
日蓮宗、寛永元年（1624）創立、
11月の御会式には万灯が繰り出
す。



御崎神社
天照大神他を祀る。境内に、鹿島神社、巖島神社、市神も祀る。



摩利支天社
大日靈女尊を祀る。八月末土曜日の花火は有名である。



真言宗、弘治3年(1557)再興
通称「オキョーイン」、寺宝に「平
塩山白雲寺過去帳」等が伝わる



福寿院

真言宗、正和2年（1313）、また貞和2年（1316）年中興と伝わる。



市川教会

日本キリスト教団市川教会 明治三十年建築。国の登録文化財



禅林寺

曹洞宗、永禄3年（1560）開基と伝わる。代官の墓もある。



円立寺

日蓮宗、元和元年（1615）創建 境内に角倉家寄進の天神様がある



宝寿寺

真言宗、弘仁3年（812年）開山と伝わる。寺宝に十二神将あり。



弓削神社

延喜式の甲斐二十社の一つ、ニギノミコト始め五神を祀る。宝物に弘治2年（1556）獅子頭あり。



宝寿院

真言宗、天正7年（1579）中興梵鐘（享保5年）や桜で有名

図 6-1 市川地区中央部主要寺社之図

も珍しく、甲州三大御幸*の一つである。

*甲州三大御幸（おみゆきさん）

「西御幸」南アルプス市下宮地の神部（かんべ）神社から、上宮地の八幡神社に向かい、翌日戻る。五穀豊穡などを願う。

「川渡り御幸」市川三郷町の表門神社から御崎神社まで神輿が芦川を渡御する、水防を祈願する。

「大御幸（三社御幸）」笛吹市の一宮浅間（神社、二宮美和神社、そして甲府市の三宮玉諸（たまもろ）神社の三社の神輿が、甲斐市の信玄堤にある三社神社をめざす。

第一日曜日 平塩の正之木稲荷神社例祭。

八日 花園院花まつり、釈迦生誕の日として町内各寺院で甘茶の接待がある。このころ桜が満開となり、宝寿院・福寿院など桜の古樹がみものである。

十八日 ニノ宮馬頭観世音祭。大正二年に

市川と上野の馬持ちが集まって弓削神社境内に石碑を建てた。近年近所の方々がお祭りをしている。

◆五月

五日 端午の節句、この日、大北の延寿院観音堂で観音堂まつり。

五月初旬 金剛院坂の延命石前で秋葉祭

五月中旬 一宮浅間神社のつつじ祭り

（二）初夏から秋のお祭り

◆六月

第三日曜日 大北の法伝寺の日朝上人・七面大明神の祭典。七難を払って七福を授ける。

三十日 弓削神社の夏越の大祓いの儀⑧。茅（かや）と蓬（よもぎ）でつくった茅の輪をくぐって半年の穢れを祓い、無病息災を祈願する。夏を迎える儀式である。

◆七月

第一土曜日 金比羅神社の金比羅祭。夏を迎える最初の夜祭。山頂で神事があり、ふもとの七軒町には臨時に里宮が開かれる。花火が上がり屋台も出て賑やかである。

第二土曜日 須佐之男社祇園祭。夜祭である。宮神輿⑨がでる。五丁目樽みこし保存会、



図6⑨ 七月 須佐之男社の祇園祭



図6⑧ 6月30日 茅の輪くぐり（弓削神社）

大門睦会も神輿を出し、三基の神輿が夜遅くまで町内を練り歩く。六丁目の御旅所には大きな樽が置かれる。そこへきゅうりを二本奉納し、一本とお札を頂いて帰る。夏の疫病を防ぐためとされている。

同日 五丁目の新蔵院の言成地藏まつり。悩みごとや願いを聞いてくれるお地藏さんの耳が開く日とされている。町内の人々が工夫して、川柳や風刺が効いた駄洒落を書いた地口行灯（じぐちあんどん）^⑩がでる。

同日 六丁目の福寿院でローソク祭り。幻想的な灯りの光景^⑪。

第三土曜日 神明宮祭。八幡神社の隣にある。紙漉きの神様で、「おしんめさん」の名で親しまれている。往時は奉納相撲があり、多くの屋台や見世物小屋もでて、芦川の土手では花火が打ち上げられた。今は夜祭として、紙漉の労働歌であり、紙漉踊り保存会が今もつたえる紙漉き踊り^⑫が奉納される。

◆八月

七日 神明の花火大会。毎年八月七日ハナビの日に行われる。三郡橋下流の中土手で二万発もの花火を打ち上げる。県下最大の花火大会で全県や東京などからおよそ二十万人が集まる。第一回は平成元年。

第四土曜日 摩利支天祭。摩利支天は仏教の守護神の一人である。一丁目のお社の南側、塩澤川崖上から豪快な打ち上げ花火・仕掛け花火が盛大に行われる。夏の最後を彩る夜祭で、多くの夜店がでる。摩利支天は虫切り・虫封じの神でもある。以前は一月十七日に、鈿や鈿の絵を奉納して封じを願う祭りが



図 6 ⑪ 七月 福寿院ローソク祭り



図 6 ⑫ 七月 神明宮祭紙漉踊り奉納



図 6 ⑩ 七月 五丁目新蔵院の言成地藏まつり

あったが、今はこの摩利支天祭と一緒に終われる。

◆九月

第一土曜日 五丁目の禅林寺秋葉堂で**秋葉大権現祭典**。秋葉堂は江戸時代の建立で、内には木彫で白狐に乗って立つ鳥頭人身のからす天狗の像がある。剣難、火難、水難を防ぐ。

二五日 七丁目の円立寺、**天満宮祭**。この祠は、慶長年間、富士川の開削工事を行った角倉了以が完成を祈願して天神様の像の板絵を寄進し建立したものである。

(三) 年末に向けて

◆十一月

二日 大北の法傳寺の**御会式**、宗祖の命日に行われる日蓮宗の法要。前日のお逮夜（おたいや）に**万灯行列**⑬がでる。東京や県内各地から参集した十数台の万灯が練り歩く。

三日 **市川郷村三社御幸祭**。弓削神社、八幡神社、八處女神社の三社の神輿⑭が町内を

巡って、一丁目御崎神社に詣でる。秋の収穫感謝と安全祈願を行う町内最大の例大祭。

同日 **一宮浅間神社御幸祭**

同日 四尾連の**子安神社**の祭礼安産・家内安全・五穀豊穡を祈って、小中学生も加わった大太神楽を奉納し、神話の世界を熱演する。町外からも多数の来場がある。

同日 下大鳥居の御崎神社でも終日**御幸祭**が行われる。

第二日曜日 **七五三**。弓削神社にお参りする。

◆十二月

二十二日 **冬至祭**。

同日 **富士浅間講社の星祭**。

三十一日 大晦日。一年の締めくくりとして宝寿院の**除夜の鐘**を聞きながら行く年を送る。



図6⑭ 11月3日 弓削神社例大祭
三社御幸祭



図6⑬ 11月2日 法傳寺御会式の万
灯行列

コラム九 火防せの神・秋葉さん

市川のまちなかでは、秋葉様や荒神様など火防せの神様が各所にまつられている。

江戸時代の市川大門村はすでに人家が密集していて、中央通りは一丁目から七丁目まで商店・旅館・料理屋などが立ち並び、ヒヤと呼ばれる狭い通路で裏通りにつながっていた。まだ消防ポンプの無かった時代、一旦火事を起こすと瞬く間に燃え広がり、町中を焼き尽くすほどの大火になった。市川大門町誌には寛政八年（一七九六）三月の吉五郎火事（焼失四百一十一軒）、天保六年（一八三五）二月の落合火事（村の建物の七割余を焼き、宝寿院の鐘楼も焼け、鐘は坂下まで落ちたという）も記されている。

当時、火伏の神として秋葉信仰が関東・関西に広まっていた。近隣有志で秋葉大神を勧請し石祠や木造の小社殿を建て、秋葉講を結成して、御札をもらいに遠州の秋葉山三尺坊大権現に代参を派遣した。

秋葉大神の石祠や小社は、道祖神にならんで鎮座していることが多い。今でもそれぞれがその近隣数十軒が寄り合ってお祭りし、直会（なおらい）をしてお札を配っている。

延寿院観音堂のわきの秋葉明神^⑮の秋葉祭は、一月十五日である。祭りの後、供物もちや菓子を入った石祠の前で撒いたそうだ。当番家が料理を用意し講員を招待して直会をし、終わると次の当番家に帖箱（じょうばこ）を運び、当番家送り式で終わる。今では直会は、石祠横の公会堂で済ましている。今の帖箱は昭和四十七年製だが、古い箱には「明治四拾五年吉月新調・秋葉山講社箱・上北丁講社」とある。昔は三年後の当番まで定めたそうで、当番家は祭りの日に各家の名前を書いた紙をならべ、その上で御幣を振り、張り付いてきた紙の名前を次の当番家としたそうだ。つい最近まで浜松の秋葉神社に代参人を送り出している。



図 6 ⑮ 大北延寿院観音堂広場の秋葉大神石祠（天保 15 年 1844）と道祖神



図 6-2 主な秋葉社のお堂、石祠、常夜燈の位置

二丁目の秋葉さん⑯は、覆殿の中に木造一間社流造の小社があり、中に「三尺坊大権現可睡斎」の木の御札が入っている。お祭りは一月で、夜祭りの道祖神祭とかち合わないように秋葉さんの祭礼は日中に行っている。昔は火を扱う職種の料理屋、鍛冶屋、燃え易い物を扱う紙漉き、畳屋などで中北秋葉講社を結成していた。今参加するのは、中北通り沿いの二・三丁目の十数軒の人たちである。祭りに使う提灯、昭和初期のノボリ（昭和十三年正一位秋葉神社中北講中正月十六日）が遺されており、昭和の頃まで遠州可睡斎に代参していた。

五丁目古倉の秋葉大神の社は木造一間社流造の小祠で、昼に秋葉祭、夕刻より道祖神祭



図 6 ⑯二丁目の秋葉社とのぼり旗、道具

りのどんと焼きをし、新しいお札を配る。春日町の秋葉さん⑱も道祖神祭と同日に行う。終わると道具箱を次の当番に引継ぎする。三月の第二日曜日には、保泉の荒神さん祭

がある⑲。三宝大荒神はかまどの神・火の神・火伏の神である。般若心経を唱え、一礼三拍手一礼で礼拝する。鬼石と秋葉大神の石祠を一緒に祀っている。天保の落合の大火で市川が焦土となった時荒神堂も焼けたため、ご神体の自然石を宝寿院の観音堂にお預けしていた。平成十一年に元の場所に還り、祭りが続けられている。

坂本踏切から平塩に上る途中の金剛院坂延命石の前に秋葉大神の石祠⑳があり、毎年五月第一日曜日に近所十数軒が集まってお参り



図 6 ⑰ 保泉の秋葉石祠と荒神さん（元治元年 1865）

している。

四丁目中北通り中倉邸の壁に秋葉大神の神棚㉑があり、御神札の版木が置いてある。「正一位秋葉神社守護」と刻まれている。江戸時代の大火の時すぐ近くの大木で類焼が止まったので秋葉大神を祀ったそうだ。

五丁目の禅林寺秋葉堂⑳では九月第一土曜日に秋葉大権現祭典をしている。秋葉堂内には木彫彩色の烏天狗立像がある（㉒上）。身の丈三尺、鼻の突き出したカラス天狗で、白狐の背に立ち、右手に剣、左手に分銅の付いた索（綱）背に翼をつけ火災の光背をつけている。光背には文化九年（一八一二）と墨書きされていて、お堂もそのころ建てられたという。



図 6 ⑱ 禅林寺の秋葉堂と烏天狗立像

講中からの代参が秋葉参りに出ている間、地元では常夜燈を灯して、火防と道中の安全を祈り、代参人の帰りを待った。

代参人は身延道を富士川沿いに下り岩淵に出たか、一旦諏訪に出て伊那谷経由で塩の道を行ったかもしれない。秋葉参りが盛になると塩の道は、秋葉街道とも呼ばれ、道しるべも兼ねて常夜燈が多く建てられた。

地区内にも、一丁目金剛院入口に元治二年の「秋葉大権現常夜燈」(一八六五)が遺されている²²⁾。

平成二十六年一月中央通りの水路改修・美装化工事の際、三丁目嶋屋前の地中から常夜



図 6 19 春日町の道祖神と秋葉社



図 6 20 四丁目中倉宅の壁の秋葉神棚



図 6 21 金剛院阪の秋葉石祠

燈の竿と礎石が掘り出された²³⁾。「秋葉大権現常夜燈 嘉永四年辛亥十一月(一八五二)」とあり、当時の秋葉講の隆盛を思わせる。礎石には「三街比屋」と刻まれている。「街」は大通りを示しており、三丁目の家並みという意味である。以前の道路工事の際に埋められたものらしい。一丁目常夜燈よりも前の貴重な文化財で、人目につくところに残したいと考え、据え直した。

秋葉講は今日で言えば近隣で力をあわせて災害に備える自主防災会にあたる。先人達が、密集した家並みを守ろうと火防の神に託した心情に深く学ぶことが肝要である。



図 6 23 中央通りから掘り出された三丁目の常夜燈(本体と礎石)(嘉永四年 1851)



図 6 22 一丁目金剛院入口の常夜燈(元治元年 1865)

コラム十 市川の道祖神

市川では、江戸時代につくられた男女一對の双体道祖神が各所にあつて、にこやかに町民を見守っている。これほど道祖神密度が高い地は珍しい。

道祖神は、別名、塞の神（さいのかみ）と呼ばれ、集落の外から来る疫神、悪霊などを村境や峠・辻・橋のたもとなどで防ぐ神であつた。後に道教や仏教の習俗も混じって行路や旅の神、今日では交通安全や子孫繁栄など民間信仰のまとなっている。

本州各地にあるが、中でも関東甲信越と鳥取県など山陰の二地域に偏在している。道祖神の御神体は、ある研究では長野県が四千体弱と最も多くその六十五%が双体道祖神であり、ついで群馬県、新潟県、山梨県は二千二百強で第四位、但し双体道祖神は十五%強と少数派である。

県内では甲府盆地の丸石道祖神が数多く、双体は長野県に近い北巨摩、富士川を挟んだ西八代郡・南巨摩郡、笛吹川上流の山間部、富士山麓等に見られる。他も石棒・陰陽石・天然の異形石、文字碑の御神体もある。また、北巨摩では神体を祀る石祠がある。



多いが、西八代郡には石祠は少ない。

市川では、全体の三分の二が双体道祖神である。中央部で建立時期が分かるのは、古いほうから七丁目の道祖神（円立寺、天明七年一七八七）・五丁目の道祖神（出口十字路、文化五年一八〇八）・一丁目の道祖神（御崎神社、文政八年一八二五）・二丁目の道祖神（安政五年一八五八）・四丁目の道祖神（慶応二年一八六六）の五体である。いずれも男神は笏、女神は檜扇を手に神官の衣裳と冠でちよいすまし顔である。六丁目の道祖神（嘉永五年一八五二）は石祠型で、他の年代不明も江戸後期と考えられる。

他にも特筆される石造物も多い。保泉の鬼石はかつて鬼が住んで数百貫の巨石を掌で転がしたという話が伝わっている。「鬼石」と刻まれた書は、江戸期の高名な書家、座光寺南屏のものといわれる。

根ノ上にある鳥塚は、芦川の流路を変更する築堤時に、人柱の代わりにひとつがいの鶏を寄州よりの崖下に生き埋めにして塚をつくり小祠を建てたものといわれている。現在は天神様・無縁様といっしょに祀られている。



六丁目の道祖神



七丁目の道祖神



落合の道祖神・地藏尊



春日町の道祖神



御陣屋の道祖神碑



図 6-2 市川地区中央部道祖神等之図

コラム十一 富士講と忍野八海再興

◆市川大門の富士講と富士講碑

原始、古代から続いて来た富士山信仰の、最も古い形態は富士山の容姿自体を遙拝するものであったといわれている。古くは富士の噴火を畏れ山足の地で富士山を拝み祀っていた。その後中世にかけて、遙拝の対象であった富士山は、山岳修験の場と登攀の対象となつて行き、平安末期には仏教修行の山となつた。富士山での山岳修行は単に登山をするだけではなく、岩陰や岩穴を行場として、そこに籠もり修行していたものと考えられている。

そうした山岳修験行者の一人長谷川角行は元亀年間に、古来からの富士山信仰に、こうした山岳修行を結び付け、江戸を中心に民衆宗教の富士講（江戸富士議）の基を開いた。富士講は江戸中期の享保年間（一七一六～）に、「食行身祿派」*1と、「村上光清派」*2の二派が生まれ、その後、江戸では天明年間（一七八一～八八）に至り「江戸八百八講」と、言われる程の隆盛を見る。

「富士講」とは、富士山に登るための講（信者が参詣などするための集まり）で、地域に

より信仰形態が異なっていた。講中は一般的に、先達（代表）、講元（財政・会計）、世話人（費用徴収）の三役によって構成された。富士登山の費用を講中の全員が出し、登山はそのうちの数名が行う「代参」という形をとっていたが、費用を出している限り、数年に一度必ず登山の順番が回ってくる仕組みになっていた。先達は、登山三十三回で「大先達」の栄誉を得る習わしがあった。

市川大門において、この富士講が盛んになるのは幕末頃である。市川大門の富士講は、先に述べた食行身祿派の流れをくむ講で、「丸仙講」と、「大我講」があった。丸仙講はこの時期にたいへんな隆盛を見せ、平塩の正木社の西に社殿（浅間社）^⑮

を設け、祈祷の音が絶え間なく聞こえたと言う。富士講では、宗祖の遺徳や先達の苦勞をねぎらい、登山三十三回で大先達になった記念や、登山四十回を記念して、その栄誉を後世に残すために石碑を建立する。丸仙講の石碑^⑯は、平塩の浅間社境内に十数基現存し



図 6 ⑮ 平塩の浅間社



図 6 ⑯ 平塩の富士講碑

*1 食行身祿（じきぎょう みろく）

寛文十一年（一六七二）～享保十八年（一七三三）。

本名は伊藤伊兵衛。伊勢出身。享保十八年富士山七合五勺目にある烏帽子岩で断食行を行い、三十五日後にはそのまま入定した。その後、身祿の娘、門人によって次々と富士講は増え、「江戸八百八講」と呼ばれるまでになった。あちこちに富士塚が築かれ、富士登山の功德が得られるとされたのであった。

*2 村上光清

天和二年（一六八二）～宝暦九年（一七五九）。

開祖角行直系の指導者として江戸で富士講の布教に努め、後に「村上派」と呼ばれる一派をおこした。享保年間、私財を投じて、北口本宮富士浅間神社を復興させた。同時代の食行身祿が貧しい庶民に教諭を広げ「乞食身祿」と呼ばれたのに対して、「大名光清」と呼ばれた。両者の活動により、その後富士講は関東で最盛期を迎える。

ている。最古のものは、宗祖食行身祿が入寂したとされる享保十八年（一七三三）から数えて百年目の天保三年（一八三二）に建立された遠忌塔で、新しいものは昭和三十一年に建立された石碑である。この場所は、いつしか人々に忘れ去られ荒れ放題のままになっていたが、近年富士講に縁のある人達の手によって、社殿も、境内もきれいに整備され、往時が偲ばれる場所となっている。

◆大寄友右衛門と「大我講」

一方、天保年間に、身祿派の教えを受けた大寄友右衛門は、丸仙講から分派して「大我講」を興し、天保十年六月（一八三九）、古城山に富士浅間明神を奉祀した。以後、古城山を地



図 6 ⑪ 古城山（おせんげんさん）

元の人は御浅間山（おせんげんさん）⑪と呼び習わして来た。大我講の石碑はこの古城山にある。「市川大門町の石造物」によると七基あり、古いものは明治二十一年に登山四十回を記念して建立された碑で、新しいものは昭和四年に建立されたとされている。四尾連湖登山道から左に少し入った所にあるが、これも昭和四十年代までは荒れたままになっていた。

「市川大門町誌稿本」では、大寄友右衛門が丸仙講から分派して「大我講」を興した事情を以下のように説明する。「（丸仙講は）隆盛を極めていたが、滿れば欠ける世の習いとか、いつしか講内に乱の萌芽現れて内紛を生じ、講内の努力家であつた大寄友右衛門氏は、（天保）十年六月往來の丸仙講に大なる不満を抱き、ここに新生面を開拓しようとして一味郷党を率いてついに分離し、自ら大我講を興して信者の増加と發展とに尽力した」と、述べている。天保十五年（一八四四）には、大我講は、甲州、武州、相州、駿州、総州の五州に及ぶ一大富士講となり、その信者数は千数百人とも言われた。甲州は特に東西河内領に多く、市川大門は百五十三人であつたという。このように短期間のうちに広範囲にわたり、多くの信者を得た大我講の創始者友右衛門と

は、どのような人物であつたのか。大寄家の末裔大寄起彦氏は著書「富士と四連湖」や論文の中で、友右衛門（兎孝（よししたか）は天明四年（一七八四）に生まれ、村役人だつた父親免頼が文化十三年（一八一六）に五十八歳で亡くなった後、村役人となり、安政三年（一八五六）七十三歳で没したと記している。当時村役人は二代まで踏襲できたという。

友右衛門の名が確実に名主として初見できるのは、文政五年午二月（一八二二）の「貯穀取立休年願」にある署名である。その後、天保三年（一八三二）には名主、天保十一年（一八四〇）には村役人（長百姓）として名が見えることから、大我講を興した天保十年には長百姓をしていたものと思われる。

◆天保の飢饉と災害

友右衛門四十九歳の天保四年（一八三三）は、全国的に多雨が続き洪水と冷害のため凶作になった。この後五力年にわたって続く天保の飢饉が始まつたのである。市川大門も例外ではなかった。この時友右衛門は、市川大門村の長百姓に名を連ねており、その様子を天保五年（一八三四）年正月「紙漉人拝借金願」で次のように述べている。

「(前略)去巳年の儀、春方より雨天打続き、夏に至りても四方高山残雪寒風吹嵐、麦作節立遅く刈取候ても雨天勝にて、落腐取実少く夫食乏、秋作は豊饒に可有と待居候処、何年にも不覚不熟にて、〈中略〉糊入紙の儀は米糊を遣い其外日雇の夫食旁旁一日の入用多分の処、雑穀共高直にて中々稼に不相成、漉立候えばとて損毛相立候〈後略〉」と嘆き、このままでは運上金の上納にも差し支えるとして、拝借金を願っている。

市川大門もこのように困窮的な状況であったが、この時期市川代官所領であった富士山裾野の高冷地にある忍草村は壊滅的な状況であった。天保五年四月八日、天候不順により吉田大沢で大雪代(底雪崩)が発生した。この雪代で火山礫を含む大量の土砂が桂川に流れ込み、忍草村の隣、谷村代官領大明見村を襲い、住居の三分の二と耕地の大部分を押し流した。この復旧工事に谷村藩役所から支給された費用は六十九両余で、村では人足を出し、炊き出しをし、諸道具を調えたという。

郡内地方の飢饉は悲惨さを極め、特に忍草村などは僻村であり、代官所も打つ手がなく「身上よきものは窮乏百姓の救済に合力すること」を命じたという。天保七年(一八三六)、

耕地の乏しい郡内地域では(忍草村はすべて畑で石高三十石)、これまで続いた凶作で米価が高騰し、米商人が売り惜しみしたため、貧民小作を中心に一揆が起こった。これが有名な「郡内騒動」で、市川大門にも波及したといわれる。

天保八年(一八三七)、忍草村やその一帯では、これまで続いた飢えと疫病で餓死者が三百九十人余り、逃散百姓は全村の四分の一の四百四十人余りに達した。このため天保九年(一八三八)三月二十九日、忍草村他五村連名で愁訴に及んだ。この間に市川大門では天保六年(一八三五)二月十一日、家数九百八十軒余りのうち七百軒余りを焼く「落合の火事」に見舞われている。

◆友右衛門と忍野八海再興

このような時代背景の下で、友右衛門が丸仙講から分派してまで大我講を興した理由を、大奇起彦氏は著書の中で次のように述べている。「天保の頃になると、富士講の教義を純朴に守る丸仙講は、飢饉や災害などの深刻な状況に対応しきれなかった。飢饉で困窮している百姓たちに、本来の目的である衆生救済ができないまま、百姓とは距離のある形骸化し



図 6 ⑩ 富士講、大正 2 年(市川の百年)

た講になりつつあった。富士講創生の頃は、水を司る神、竜神(竜王)を祭祀し、外八湖内八湖*3も巡拝した、それがいつしか忘れ去られたことがさまざまな災いにつながっていると思うようになった。先年行った御内八湖巡拝では、かつての霊地は荒れ果て、路傍には行き倒れの死骸さえあった。五年の間続いている飢饉は、長雨、日照り、洪水、火災と、どれも水に起因している。」

友右衛門は創生期以来廃れていた竜神信仰を復興させる必要を感じ、衆生救済の具体的な行動を取るため、荒廃していた富士講修験霊場である元八湖（忍野八海）再興を思い立ち、丸仙講から分派し、天保十年六月大我講を興した」と記している。水を司る神は富士山が噴火をしていたころは、火を鎮める神として祀られ、やがて噴火が治まると農耕の神として信仰されるようになったという。

天保十四年（一八四三）、友右衛門らは忍草村東円寺の檀徒らと協力して、道を造り、池の土砂を運び、八つの池各々に水の神、龍神を祀り、碑を建て、廃れていた元八湖の再興を果たした。碑には池の名称、禊ぎの順番、竜王名、和歌などが刻まれている¹⁹²⁰。

この頃、幕府は富士講のような異形ないでたち¹⁸で徒党を組み、護符などを売り付けることを極端に嫌い、幾度か富士講を禁止していた。しかし元八湖再興に関しては諸手続きに問題がなく、管理していた東円寺によれば、むしろ奇特なこととして扱われている。

元八湖再興の資金は、大我講信者の寄進で賄われた、その内訳は「金二十両市川大門村惣代三左衛門・操右衛門、金七十二両三分二朱二十八名、不足分八十六両三分二朱、友右

衛門出金」合わせて百八十両余り、人足は東円寺の檀徒を中心に、延二千百人余りであった。元八湖再興後、大我講の信者は富士登山の前に、必ずこの元八湖を巡拝する習わしとなった。富士信仰を基盤とした友右衛門らの行動は、単なる一過性の寄進と異なり、信心深い講仲間が何度も訪れることによって、今日につながる永続的な賑わいを見せることとなった。

こうした友右衛門らの行動は、忍野村では高く評価され、学校の副読本にもなっている。ある意味、今日の富士山信仰の世界文化遺産登録に市川大門の人物が貢献したということになる。但し、市川大門では富士講や富士講碑も、友右衛門の事も語り継がれないまま現在に至っている。

*3 富士八海

内八湖（海）は富士五湖に明見湖、四尾連湖、須津湖（富士市）もしくは浮島沼を加えた八湖。

元八湖（忍野八海）は出口池、お釜池、底抜池、銚子池、湧池、濁池、鏡池、菖蒲池。



図 6 20 忍野八海五番霊場湧池



図 6 19 湧池の碑（同左）